

資治通鑑 第228 卷

【唐紀四十四】 起昭陽大淵獻正月，盡十月，不滿一年。

■唐、続国訳漢文大成 經子史部 第13 卷 100p

德宗神武聖文皇帝三建中四年（癸亥，783年）

■**吐蕃**春，正月，丁亥(23)，隴右節度使の**張鎰**は吐蕃と尚ほ贊盟を清水(秦州に属す。甘肅省渭川道天水県西、現・天水市清水県)に結ぶ。

【顔真卿は死地に赴く】

■**[李希烈は東都を脅かす]**庚寅(26)，**李希烈**は其の將の**李克誠**を遣わして襲いて汝州(梁県に治す、河南省河洛道臨汝県、現・汝州市)を陥とし、別駕の**李元平**を執る。**元平**は、本は湖南の判官なり、**薄**^{いささ}か才藝有り、性は疏傲にして、敢えて大言し、好みて兵を論じる。中書侍郎の**關播**は之を奇とし、上に薦め、以て將相之器と為し、汝州が許州を距ること(270里)最も近きを以てし、**元平**を擢んで汝州別駕と為し、州事を知たらしむ。**元平**は州に至り、即ち工徒を募りて城を治める。**希烈**は陰に壯士をして往きて募りに應じて役を執ら使め、數百人を入れ、**元平**は之を覺らず。**希烈**は**克誠**を遣わして數百騎を將いて突きて城下に至り、應募する者は之に内に應じ、**元平**を縛して馳せ去る。**元平**の人と為りは眇小にして、須(ひげ)無し、**希烈**を見て恐懼し、(13-101p)便液(尿)地を汚す。**希烈**は之を罵りて曰く、

「盲宰相汝を以て我に當たらしむ、何ぞ相い輕んじる也！」

判官の**周晃**を以て汝州刺史と為し、又た別將の**董待名**等を遣わして四出して抄掠せしめ、尉氏(汴州に属す県)を取り、鄭州を圍み、官軍は數々敗る所と為る。邏騎(巡邏遊奕の騎馬)は西して**彭婆**(河南省河洛道洛陽県の鎮)に至り、東都の士民は震駭し、山谷に竄匿す。留守の**鄭叔則**は入りて西苑(東都の西)を保つ。

■**[盧杞は顔真卿に李希烈説得を提案]**上は計を**盧杞**に問い、對えて曰く、

「**希烈**は年少の驍將にして、功を待みて驕慢なり、將佐は敢えて諫止する莫し。誠に儒雅の重臣を得、聖澤を奉宣し、為に逆順禍福を陳べれば、**希烈**は必ず心を革めて過ちを悔いん、軍旅を勞せず而して服す可からん。**顔真卿**は三朝(玄宗・肅宗・代宗)の舊臣なり、忠直剛決にして、名は海内に重し、人の信服する所なり、真に其の人也！」

上は以て然りと為す。甲午(30)，**真卿**に命じて許州に詣り**希烈**を宣慰せしむ。詔は下り、朝を舉げて色を失う。

■**[李希烈は顔真卿を留める]****真卿**は驛に乗りて東都に至り、**鄭叔則**は曰く、

「往けば必ず免かれず、宜しく少しく留まり、後命を須つべし。」

真卿は曰く、

「君命也、將に焉んぞ之を避けんや！」

遂に行く。**李勉**は表して言う、

「一元老を失うは、國家の羞と為す、請う之を留めん。」

又た人をして**真卿**を道に邀え使む、及ばず。**真卿**は其の子に書を與え、但だ敕するに家廟を奉じ、諸孤を撫すを以てし而して已む。許州に至り、詔旨を宣べんと欲し、**希烈**は其の養子(壯士を養いて養子と為す)千餘人をして環繞して慢罵し、拔刃して之を擬し、將に剗啖(刻み食らう)せんとする之勢いを為さ使む。**真卿**は

足移らず、色變わらず。**希烈**は遽に身を以て之を蔽い、衆を麾きて退か令め、**真卿**を館し而して之を禮す。**希烈**は**真卿**を遣りて還らしめんと欲し、會々**李元平**は座に在り、**真卿**は之を責め、**元平**は慚じ而して起ち、密啟を以て**希烈**に白す。**希烈**の意は遂に變じ、**真卿**を留めて遣らず。

■[**李希烈は顔真卿に劍を与える**] **朱滔**、**王武俊**、**田悅**、**李納**は各々遣使して**希烈**に詣り、上表して臣と稱し、勸進す。使者は**希烈**の前に拜舞し、**希烈**を説いて曰く、

「朝廷は功臣を誅滅し、信を天下に失う。都統**英武**は天よりし、功烈は世を蓋い、已に朝廷の猜忌する所と為り、將に韓、白之禍い(韓信は鍾室に斬られ、白起は杜郵に死す)有らんとす、願わくは亟かに尊號を稱し、四海の臣民をして歸する所有るを知ら使めよ。」

希烈は**顔真卿**を召し之を示して曰く、

「今四王(**朱滔**を冀王、**王武俊**を趙王、**田悅**を魏王、**李納**を齊王と稱す)は遣使して推され、謀らず而して同じ、太師(**顔真卿**は太子太師なり)は此の事勢を觀よ、豈に吾れ獨り朝廷の忌む所と為り自ら容れる所無し邪！」

真卿は曰く、

「此れ乃ち四凶なり、何ぞ四王と謂う！相公は自ら功業を保ち、唐の忠臣と為らず、乃ち亂臣賊子と相い從う、之と同じく覆滅せんことを求める邪！」

希烈は悦ばず、**真卿**を扶けて出でしむ。他日、又た四使と同宴し、四使は曰く、

「久しく太師の重望を聞く、今都統は將に大號を稱せんとし而して太師は適々至り、是れ天は宰相を以て都統に賜う也。」(13-102p)

真卿は之を叱して曰く、

「何ぞ宰相と謂う！汝は**安祿山**を罵り而して死する者の**顔杲卿**(²¹⁷ 卷肅宗至德元載にあり)有るを知る乎？乃ち吾が兄也。吾の年は八十、節を守り而して死するを知る耳、豈に汝が曹の誘脅(利を以て之を動かすを誘、威を以て之に迫るを脅)を受けん乎！」

四使は敢えて復言せず。**希烈**は乃ち甲士十人をして**真卿**を館舎に守ら使め、坎を庭に掘り、雲う、

「之を坑にせんと欲す。」

と、**真卿**は怡然として、**希烈**を見て曰く、

「死生は已に定まる、何ぞ必ずしも多端ならん！亟かに一劍を以て相い與えよ、豈に公の心事を快くせざらん邪！」

希烈は乃ち之を謝す。

■[**哥舒曜は希烈の前鋒を破る**] 戊戌(34)、左龍武大將軍の**哥舒曜**を以て東都、汝州節度使と為し、鳳翔、邠寧、涇原、奉天、好時の行營の兵萬餘人(鳳翔・邠寧・涇原の三節鎮の兵、奉天・好時・神策の屯兵)を將いて**希烈**を討たしめ、又た諸道に詔して共に之を討たしむ。**曜**は行きて郊城(汝州に属す県、汝州の盜難 90 里、河南省河洛道郊県、現・三門峡市陝州区)に至り、**希烈**の前鋒の將の**陳利貞**に遇い、撃ちて之を破る。**希烈**の勢いは小しく沮む。

曜は、**翰**(天寶の末に安祿山は反し、哥舒翰は潼關に敗没す)之子也。

■[**希烈は南路断絶**] **希烈**は其の將の**封有麟**をして鄧州に據ら使め、南路は遂に絶ち、貢獻、商旅は皆な通じず。壬寅(38)、詔して上津(商州に属す、湖北省襄陽道鄖西県の西北 140 里、現・十堰市鄖西県上津鎮)の山路を治め、郵驛を置かしむ。

■**吐蕃**二月、戊申(44)朔、鴻臚卿の**崔漢衡**に命じて**區頰贊**(前卷前年に入見)を送りて吐蕃に還らしむ。

■丙寅(2)、河陽の三城、懷、衛州を以て河陽軍と為す。

■丁卯(3)、**哥舒曜**は汝州に克ち、**周晃**を擒とす。

■**[曹王の皋は蕲州を抜く]**三月，戊寅(14)，江西節度使の曹王の**皋**は**李希烈**の將の**韓霜露**を**黃梅**(蕲州に属す県、州より120里、湖北省江漢道、現・黃岡市黃梅縣)に敗り，之を斬る。辛卯(27)，黃州を抜く。時に**希烈**の兵は**蔡山**(黃梅の界にあり。即ち江左の新蔡郡の治所、魯悉達ろしだの保聚の地、現・黃岡市黃梅縣)に柵し，險にして攻める可からず。

皋は、

「西に**蕲州**(後漢の蕲春侯国。吳は蕲春郡を置く。湖北省江漢道蕲春縣西北、現・湖北省黃岡市蕲春縣 or 蕲水縣)を取らん」と聲言し、舟師を引いて江を溯り而して上り，**希烈**之將は兵を引いて江に循いて隨いて戦う。蔡山を去ること三百餘里，**皋**は乃ち復た舟を放ちて流れに順いて而して下り，急に蔡山を攻め，之を抜く。**希烈**の兵は還りて之を救い，及ばず而して敗る。**皋**は遂に進みて蕲州を抜き，**伊慎**を表して蕲州刺史と為し，**王鏐**を江州刺史と為す。

■**[顏真卿を龍興寺に置く]**淮寧都の虞侯の**周曾**、鎮遏兵馬使の**王玢**、押牙の**姚愔**、**韋清**は密に款を**李勉**に輸る。**李希烈**は**曾**を遣わし十將の**康秀琳**と兵三萬を將いて**哥舒曜**を攻め，**襄城**(漢は潁川郡に属し、晋は襄城軍に属し、北周は汝州を置く。唐の貞觀元年に州を廢し、襄城縣を以て許州に属す。河南省開封道襄城縣、現・許昌市襄城縣)に至り，**曾**等は密に軍を還して**希烈**を襲わんと謀り，**顏真卿**を奉じて節度使と為し，**玢**、**愔**、**清**をして内應を為さしめんとす。**希烈**は之を知り，別將の**李克誠**を遣わして驍軍三千人を將いて**曾**等を襲わしめ，之を殺し，並せて**玢**、**愔**及び其の黨を殺す。甲午(30)，詔して**曾**等に官を贈る。始め**韋清**は**曾**等と約し，

「事は洩れるとも相い引かず」(13-103p)

と，故に獨り免かるを得る。**清**は終に禍いの及ぶを恐れ，**希烈**に説き**朱滔**に詣りて師を乞わんと請い，**希烈**は之を遣り，行きて**襄邑**(宋州の縣、**劉洽**は時に宣武節度を以て宋州に鎮す)に至り，逃げて**劉洽**に奔る。**希烈**は**周曾**等に變有るを聞き，壁を閉じること數日。其の黨の尉氏、**鄭州**に寇する者は之を聞き，亦た遁げ歸る。**希烈**は乃ち上表して咎を**周曾**等に歸し，兵を引いて**蔡州**(汝陽縣に治す、淮寧の本鎮なり。**希烈**は時に許州より退き還る)に還り，外に過ちを悔いて順に従うを示し，實は**朱滔**等之援を待つ也。**顏真卿**を龍興寺(蔡州に在り)に置く。丁酉(33)，荊南節度使の**張伯儀**は淮寧の兵と安州(湖北省江漢道安陸縣、現・孝感市安陸市)に戦い，官軍は大敗し，**伯儀**は僅に身を以て免れ，其の持する所の節を亡う。**希烈**は人をして其の節及び俘馘を以て**顏真卿**に示さしむ。**真卿**は號慟して地に投じ，絶え而して復た甦り，是より復た人と言(物言う)わず。

■**[李希烈討伐軍の負担大]**夏，四月，上は神策軍使の**白志貞**を以て京城召募使と為し，禁兵を募り以て**李希烈**を討たんとす。**志貞**は請う、

「諸々の嘗て節度、觀察、都團練使と為る者は，存没を問わず，並びに其の子弟を勒し奴馬を帥い自ら資裝を備えて從軍しせしめ，授けるに五品の官を以てせん。」

と、貧者は甚だ之を苦しみ，人心は始めて搖らぐ。(德宗は兵を窮め、乱將に起こらんとす)

■**[吐蕃^{おうきようさん}と血盟]**上は宰相、尚書に命じて吐蕃の**區頰贊**と豐邑裡に盟わしむ，**區頰贊**は清水之盟(是の年春に張鑑は吐蕃と清水に盟う。その文に曰く、「今国家の守る所の界、涇州は西のかた彈箏峽西に至り、隴州は西のかた清水縣に至り、鳳州は西のかた同谷縣に至り、暨び劍南の西山渡河の東を漢の界と為し、蕃国の守備は蘭渭原會に在り、西は臨洮に至り、又た東は成州に至り、劍南の西界磨些諸蠻大渡水の西南に抵るまでを蕃界と為すと)に，疆場未だ定まらざるを以て，盟を果たさず。己未(55)，**崔漢衡**(是の年二月、崔漢衡に命じて區頰贊を送らしむ。蓋し之と盟はんと欲して之を遣る。久しくして盟未だ定まらず。又漢衡に命じて吐蕃に入り贊普に決せしむ。此の時中国は兵に疲れ、彼固に以て唐を窺う有り。盟うも益無きなり)に命じて吐蕃に

入り、**贊普**に決せしむ。

■**[哥舒曜は襄城を保つ]**庚申(56)、永平、宣武、河陽都統の**李勉**(李免×)に淮西招討使を加え、東都、汝州節度使の**哥舒曜**を之が副と為し、荊南節度使の**張伯儀**を以て淮西應援招討使と為し、山南東道節度使の**賈耽**、江西節度使の曹王の**皋**を之が副と為す。上は**哥舒曜**を督して兵を進め、**曜**は**潁橋**(襄城県に潁橋鎮有り)に至り、大雨に遇い、還りて襄城を保つ。**李希烈**は其の將の**李光輝**を遣わして襄城を攻めしめ、**曜**は撃ちて之を卻く。

■五月、乙酉(21)、潁王の**澈**(王偏の字、玄宗の子)は薨ず。

■乙未(31)、宣武節度使の**劉洽**を以て淄青招討使を兼ねしむ。

■**[李晟と朱滔の戦い]****李晟**は涿、莫の二州を取りて、以て幽、魏の往來之路を絶たんと謀り、**張孝忠**之子の**升雲**と**朱滔**が署する所の易州刺史の**鄭景濟**を清苑(漢の榮郷県、信都国に属す。隋は清苑県と為し、瀛州に属す。唐の景雲元年に冀州に属す。直隸省保定道清苑県、現・保定市清苑区)に圍む、累月下らず。**滔**は其の司武尚書(天朝の兵部尚書の如し)の**馬寔**を以て留守と為し、歩騎萬餘を將いて魏の營を守らしめ、自ら歩騎萬五千を將いて清苑を救う。**李晟**の軍は大敗し、退きて易州を保つ。**滔**は還りて瀛州に軍し、**張升雲**は滿城(漢の北平県の地。易州に属す。直隸省保定道滿城県の西二里、現・保定市滿城区)に奔る。會々**晟**の病は甚だしく、軍を引いて還りて定州を保つ。

■**[王武俊は李滔を怨む]****王武俊**は滔が既に**李晟**を破り、(13-104p)留まりて瀛州に屯し、未だ魏橋に還らざるを以て、其の給事中の**宋端**を遣わして之を趣す。**端**は滔を見、言は頗る不遜なり、滔は怒り、**武俊**に謂って曰わ使む、

「滔は熱疾を以て、暫く未だ南に還らず、大王二兄は遽に云云有り。滔は魏博を救う之故を以て、君に叛き兄を棄てること、屢を脱するが如き耳。二兄は必ず相い疑い、惟だ二兄の為す所！」

端は還り報じ、**武俊**は自ら**馬寔**に辨じ、**寔**は狀を以て滔に白し、言う、

「趙王は**宋端**が大王に無禮なるを知り、深く責讓を加え、實に他志無し。」

武俊も亦た承令官(時に武俊等は要籍官を改める)の**鄭和**を遣わして**寔**の使者に隨いて滔を見、之に謝す。滔は乃ち悦び、相い待つこと初めの如し。然るに**武俊**は是を以て益々滔を恨む矣。

■**[李抱真是賈林に王武俊を説得させる]**六月、**李抱真**は參謀(節度參謀は軍中の機密に関する)の**賈林**をして**武俊**の壁に詣りて詐り降ら使む。**武俊**は之を見る。**林**は曰く、

「**林**は來たるは詔を奉ず、降るに非ざる也。」

武俊は色動き、其の故を問う、**林**は曰く、

「**天子**は(李惟岳を誅するをいう)大夫が宿に誠效を著わすを知る(胡三省曰く、賈林は先ず武俊の心事を言い、後に天子の詔旨を述べ、過を悔いるの意を鋪陳す。善く説くと謂う可し)、登壇之日(王を称する時)に及び、膺を撫して左右を顧みて曰く、『我は本忠義に徇ず、**天子**は察せず。』諸將も亦た嘗て共に大夫之志を表す。**天子**は使者に語りて曰く、『朕は前事誠に誤まる、之を悔いるとも及ぶ無し。朋友は意を失うは、尚ほ謝す可し、況んや朕は四海之主なる乎。』」

武俊は曰く、

「僕は胡人也、將と為り尚ほ百姓を愛するを知る、況んや**天子**、豈に専ら殺人を以て事と為さん乎！今山東は兵を連ね、骨を暴(さら)すこと莽の如し、就使克捷すれども、誰と之を守らん！僕は歸國を憚らず、但だ已に諸鎮と結盟す。胡人の性は直なり、曲をして己に在ら使むるを欲せず。**天子**は誠に能く詔を下して諸鎮之罪を赦せば、僕は當に化に従うを首唱すべし。諸鎮は従わざる者有れば、請う辭を奉じて之を伐たん。此くの如く、則ち上は**天子**に負かず、下は同列に負かず、五旬に過ぎず、河朔は定まらん矣。」

林をして還りて抱真に報ぜ使め、陰に相い約結す。

■**[税間架の課税]**庚戌(46)、初めて税間架(家屋の間口定率課税)、除陌錢(交易税)の法を行う。時に河東、澤潞、河陽、朔方の四軍は魏縣に屯し、神策、永平、宣武、淮南、浙西、荊南、江泗(江は江南西道をいう、泗は當に西につくるべし)、沔鄂、湖南、黔中、劍南、嶺南の諸軍は淮寧之境を環る。舊制では、諸道の軍は境を出ずれば、則ち給を度支に仰ぐ。上は士卒を優恤し(胡三省曰く、書に之れ有り、威、厭愛に克てば允に濟り、愛、厭威に克てば允に功罔しと。徳宗は蓋し未だ此れを知らざる者なりと)、境を出る毎に、酒肉を加え給し、本道の糧は仍ほ其の家に給す。一人は三人之給を兼ね、故に將士は之を利とす。各々軍を出し才に境を逾え而して止まる、月に錢百三十餘萬緡を費す、常賦は供する能わず。判度支の趙贊は乃ち奏して二法(税間架・除陌錢)を行う。所謂税間架と者、屋毎に兩架を間と為し、上屋の税は錢二千、中税は千、下税は五百、吏は筆を執りて算を握り(算は以て籌算する所のもの。其の法は竹の徑一分、長さ六寸なるもの、271枚を用いて成り、六觚を一提と為す)、人の室廬に入りて其の數を計る。或は宅屋多くも而るに它の資無き者有り、(13-105p)錢を出すこと動もすれば數百緡。敢えて一間を匿せば、杖六十、告げる者に錢五十緡を賞す。所謂除陌錢と者、公私の給與及び賣買に、緡毎に官五十錢を留め、它物を給し及び相い貿易する者は、錢を約して率と為す。敢えて錢百を隱せば、杖六十、罰錢二千、告げる者に錢十緡を賞し、其の賞錢は皆な事に坐する之家に出ず。是に於いて愁怨之聲は、遠近に盈つ。

■丁卯(3)、郴王の逾(上の弟)を徙して丹王と為し、鄜王の遵(上の弟)を簡王と為す。

■**[吐蕃]**李揆を吐蕃に使いさせる]庚午(6)、答蕃判官(当時出で使いする者に因りて署置し、以て官名とす)監察御史の於頔は吐蕃の使者の論刺沒藏と青海より至り、言う、

「疆場は已に定まる、請う區頰贊を遣りて國に歸らしめん。」

秋、七月、甲申(20)、禮部尚書の李揆を以て入蕃會盟使(入蕃を官に命くこと猶ほ答蕃の如し)と為す。壬辰(28)、諸將相に詔し區頰贊と城西に盟わしむ。李揆は才望有り、盧杞は之を惡み、故に之をして吐蕃に入ら使む。揆は上に言つて曰く、

「臣(巨×)は遠行を憚らず、恐らくは道路に死し、詔命を達する能わず！」

上は之が為に惻然とし、杞に謂つて曰く、

「揆は乃ち太だ老いたる無からんや！」

對えて曰く、

「遠夷に使いするは、朝廷の故事に諳練する者に非ざれば不可なり。且つ揆行けば、則ち今より年の揆より少き者は、敢えて遠使を辭せざらん矣。」

■**[李希烈は襄城を囲む]**八月、丁未(43)、李希烈は兵三萬を將いて哥舒曜を襄城に圍み、李勉及び神策將の劉德信に詔して兵を將いて之を救わしむ。乙卯(51)、希烈の將曹の季昌は隨州を以て降り、尋いで復た其の將の康叔夜の殺す所と為る。

■**[翰林學士の陸贄]**初め、上は東宮に在り、監察御史の嘉興(漢の由拳縣。吳の大帝青龍三年に嘉禾生ずるを以て、禾興縣と改める。後に太子和の名を避けて嘉興縣と改める。唐は蘇州に属す。浙江省錢塘道、現・嘉興市)の陸贄の名を聞き、即位し、召して翰林學士(開元 26 年、翰林供奉、始めて改めて學士と稱す。別に學士院を翰林院の南に建て、成命を専らにせしむ)と為し、數々問うに得失を以てす。時に兩河(河南・河北)は兵を用い久しく決せず、賦役は日々に滋く、贄は兵窮まり民困しむを以て、別に内變を生じるを恐れ、乃ち上奏す、其の略に曰く、

「敵に克つ之要は、乎(続は無し)將其の人を得るに在り。將を馭する之方は、乎(続は無し)操其の柄を得るに在り。將其の人に非ざる者は、兵は衆しと雖も恃むに足らず。操其の柄を失う者は、將材なりと雖も用を

為さず。」

又た曰く、

「將は兵を使う能わず、國は將を馭する能わざれば、止だ財を費し寇を玩ぶ之弊のみに非ず、亦た戢めずして自ら焚く之災有り。(左氏傳に曰く、兵は猶ほ火のごとし、戢めざれば自ら焚くと)」

又た曰く、

「今兩河、淮西叛亂之帥為る者は、獨り四五の凶人(河北の朱滔・王武俊・田悅・河南の李納・淮西の李季烈)而して已む。尚ほ恐れる其の中或は傍に(続は無し)註誤に遭い、内に危疑を蓄え、蒼黃(倉皇と同じ)として圖を失い、勢いは止むを得ざらん。況んや其の餘衆、蓋し並びに脅從(脅し従わせる)ならん、苟くも全生を知れば、豈に惡を為すを願わんや！」

又た曰く、

「目前之虞^{うれ}いを紓^{ゆる}ぶる無かれ、(13-106p)或は意外之患(続は變)を興さん。人者、邦之本也。財者、人之心也。其の心傷つけば則ち其の本は傷つき、其の本傷つけば則ち枝幹は顛^{てん}瘁^{すい}す矣。」

又た曰く、

「人搖れて寧からざれば、事變測り難し、是を以て兵は拙速を貴ぶ、巧遲を尚(続は貴)ばず。若し本に靖めず而して務めて末に救えば、則ち救い之為す所は、乃ち禍い之起きる所也。」

又た關中の形勢を論じて、以為く、

「王者は威を蓄え以て德を昭らかにす、偏廢すれば則ち危うし。重きに居りて以て輕きを馭す、倒持すれば則ち悖^{もと}る。王畿者、四方之本也。太宗は府兵を列置し、禁衛を分隸し、大凡諸府は八百餘所、而して關中に在る者は殆んど五百焉。天下を舉げて關中之半(続は無し)に敵せず、則ち重きに居り輕きを馭する之意明らかなり矣。承平は漸く久しく、武備は浸く微に、府衛具^{つぶさ}に存すと雖も而も卒乘(兵乗と馬乗)習うこと罕なり。故に祿山は倒持之柄を竊み(玄宗天寶十四載、肅宗は至徳元年にあり)、外重之資に乘じ、一舉に天に^{はびこ}浴り、兩京は守られず。尚ほ西邊に兵有り、諸牧に馬有り、州毎に糧有るに頼り、故に肅宗は以て中興するを得る。乾元之後、繼ぎて外虞有り、師を悉くして東討し、邊備は既に弛み、禁戒亦た空し、吐蕃は虚に乗り、深く入りて寇を為す、故に先皇帝(223 卷代宗廣徳元年にあり)與に御を為す莫く、之を避けて東遊す。是れ皆な重きに居りて輕きを馭する之權を失い、根を深くし柢を固くする之慮りを忘れるなり。内寇には則ち汧、函險を失い、外侵には則ち汧、渭戎と為る。斯之時に於いて、四方之師有ると雖も、寧ぞ一朝之患を救わんや、陛下は追想し此に及べば、豈に之が為に寒心せざらん哉！今朔方、太原之衆は、遠く山東に在り(李懷光が朔方の軍を以て、馬燧は太原の軍を以て、田悅の兵を討ちて解けざるをいう)。神策六軍(左右雨林、左右龍武、左右神策軍をいう。又曰く、左右雨林・龍武・神武を六軍と為す。神策軍は最も盛んにして六軍の右に在り。時に李晟・哥舒曜・劉徳信などは皆禁兵を以て関を出で賊を討つ)之兵は、繼ぎて關外に出ずる。儻し賊臣寇^{くら}に啖わし、黠虜は邊を^{うかが}覷い、隙を伺いて虚に乗り、微しく亭障(烽火台)を犯す有れば、此れ愚臣が竊に憂える所也。未だ審かにせず陛下は其れ何を以て之を御がんや！側^{ほのか}に聞くに叛を伐つ之初め、議者は多く其の事を易しとし、僉^みな謂えらく、征有りて戦い無し、役は時を逾えずと、兵を計ること未だ甚だ多からず、費を度ること未だ甚だ廣からず、事に於いて擾る無しと為し、人に於いて勞せずと為す。曾て兵連なり禍いを拏^なぎ(相い牽引す)、變故測り難きを料らず、日に引き月に長く、漸く始圖に乗(乖×)ず。往歲天下の患う所と為り、鹹な之を除けば則ち昇平を致す可しと謂う者は、李正己、李寶臣、梁崇義、田悅是れ也。往歲國家の信ずる所と為(謂×)り、鹹な之に任ずれば則ち禍亂を除く可しと謂う者は、朱滔、李希烈是れ也。既に而して正己は死し、李納は之に繼ぐ。寶臣は死し、惟岳は之を繼ぐ。崇義は卒し、希烈は叛す。惟岳は戮せられ、朱滔は攜^たる(離れる、貳あ

り。然らば則ち往歳之患うる所の者は、四に其の三を去る矣、而るに患いは竟に衰えず。往歳之信ずる所の者は、今則ち自ら叛す矣、而して餘は又た保し難し。是に知る、國を立てる之安危は勢いに在り、事を任ずる之濟否は人に在り。勢いは苟くも安ければ、則ち異類も同心する也。勢いは苟くも危うければ、則ち舟中も敵國也。**陛下**は豈に往事を追鑒し、惟れ令圖を新たにし、偏廢(偏廢這×)の柄を**(13-107p)**修めて以て人を靖んじ、倒持(漢人曰く、秦は太阿を倒に持ち、楚に其の柄を授けると)之權を復して以て國を固めざる可けんや！而るに乃ち孜孜汲汲として、思いを報(続は極)い神を勞し、已む無き之求めに徇い、必し難き之效を望まん乎！今關輔(関中及び三輔地区)之間、征發は已に甚だしく、宮苑之内(北軍は皆な苑中に屯す、時に悉く行營に在り)、備衛全からず。萬一將帥之中、又た**朱滔**、**希烈**の如きもの、或は固きを邊壘(たの)に負み、豺狼を誘致し、或は竊に郊畿に發し、城闕を驚犯するあれば、此れ亦た愚臣が竊に憂いを為す所の者也(姚令言・朱泚の變、卒に陸贄が料りし所の如し)、未(夫×)だ審かにせず**陛下**は復た何を以て之に備えんか！**陛下**は儻し過ちて愚計を聽けば、遣る所の神策六軍の**李晟**等及び節將の子弟(白志貞が奏し遣りて東征せしめし所の者なり)は、悉く追還す可し。明かに涇、隴、邠、寧に敕し、但だ嚴備封守せ令めよ、仍ほ雲う、更に征發せずと、各々安居を保するを知らしめよ。又た德音を降し、京城及び畿縣の間架等の雜稅を罷めるべし、則ち冀わくは已に輸する者は怨みを弭め、見に處る者は寧きを獲え、人心搖らさず、邦本自ら固からん。」
上は用いる能わず。

■**[崔縱を魏州四節度都糧料使]**壬戌(58)、汴西運使(汴東西運使のこと、前卷前年にあり)の**崔縱**を以て魏州四節度都糧料使(河東節度使馬燧・澤潞節度使李抱真・河陽節度使李瓦・朔方節度使李懷光の四軍は時に並びに魏州行營に在り)を兼ねしむ。**縱**は、**渙**(玄暉の孫、玄宗は蜀に幸し、以て相と為す)之子也。

■**[襄城攻防戦]**九月、丙戌(22)、神策將の**劉德信**(劉德言×)、宣武將の**唐漢臣**は淮寧將の**李克誠**と戦い、滙澗に敗る。時に**李勉**は**漢臣**を遣わして兵萬人を將いて襄城を救わしむ、上は**德信**を遣わして諸將家の應募者三千人を帥いて之を助けしむ。**勉**は奏す、

「**李希烈**の精兵は皆な襄城に在り、許州は空虚なり、若し許州(去年李希烈は徙りて許州に鎮す。蓋し虚に乗じて其の巢穴を擣かんと欲するなり。則ち希烈の襄城の囲みを釋てて以て自ら救わん)を襲えば、則ち襄城の圍みは自ら解かん。」
二將(蔣×)を遣わして許州に趣かしむ、未だ至らざること數十里、上は中使を遣わし其の詔に違えるを責める、二將は狼狽し而して返り、復た斥候無し。**克誠**は兵を伏せて之を邀え、殺傷は大半なり。**漢臣**は大梁に奔り、**德信**は汝州に奔る。**希烈**の遊兵は剽掠して伊闕(禹の鑿る所、隋は伊闕と為す。唐は河南府に属す)に至る。**勉**は復た其の將の**李堅**を遣わして四千人を帥いて助けて東都を守らしめ、**希烈**は兵を以て其の後を絶つ、**堅**の軍は還るを得ず。汴軍(宣武の兵なり。此の時、李勉は永平軍を帥いる。大曆十四年に永平軍は汴潁二州を増し領し、徙りて汴州に治す。故に汴軍の称あり)は是に由りて振わず、襄城は益々危うし。

■**[舒王謨の軍は発せず]**上は諸軍の淮寧を討つ者が相い統壹せざるを以て、庚子(36)、**舒王謨**を以て荊襄等道行營都元帥と為し、名を**誼**に更める。戸部尚書の**蕭復**を以て長史と為し、右庶子の**孔巢父**を左司馬と為し、諫議大夫の**樊澤**を右司馬と為し、自餘の將佐は皆な中外之望を選ぶ。未だ行かざるに、會々涇師は亂を作し而して止む。**復**は、**嵩**(開元中に相と為る)之也。**巢父**は、**孔子**の三十七世孫也。

【兵反乱で皇帝は都脱出】

■**[姚令言の兵の反乱]**上は涇原等諸道の兵を發して襄城を救う。冬、十月、丙午(42)、涇原節度使の**姚令言**は兵五千を將いて京師に至る。**(13-108p)**軍士は雨を冒し、寒さ甚だしく、多く子弟を攜え而して來た

り、厚賜を得て其の家に遺らんことを冀い、既に至り、一に賜る所無し。丁未(43)、發して滻水に至り、京兆尹の**王滻**に詔して師を犒わしめ、惟だ糲食(粗悪な飲食)菜啖なり。衆は怒り、蹴り而して之を覆し、因りて揚言して曰く、

「吾が輩は將に敵に死せんとす、而るに食すら且つ飽かず、安んぞ能く微命を以て白刃を拒がん邪！聞く瓊林、大盈の二庫(玄宗の時に置く)、金帛は盈溢し、相い與に之を取るに如かず。」

乃ち甲を擻し旗を張り鼓噪して、還りて京城に趣く。**令言**は入りて辭し、尚ほ禁中に在り、之を聞き、馳せて長樂阪(滻水の西に在り、本の滻阪なり。隋の文帝は其の名を惡み、改めて長樂阪と名づく)に至り、之に遇う。軍士は**令言**を射、**令言**は馬鬣を抱きて突きて亂兵に入り、呼びて曰く、

「諸君は計を失う！東征して功を立てれば、何の富貴ならざるを患えん、乃ち族滅之計を為す乎！」
軍士は聽かず、兵を以て**令言**を擁し而して西す。上は遽に命じて帛、人ごとに二匹を賜わしむ。衆は益々怒り、中使を射る。又た中使に命じて宣慰せしむ、賊は已に通化門(京城の東面北來の第一門)外に至り、中使は門を出で、賊は之を殺す。又た命じて金帛二十車を出して之に賜わしむ。賊は已に城に入り、喧聲浩浩として、復た遏む可からず。百姓は狼狽して駭き走り、賊は大呼して之に告げて曰く、

「汝が曹は恐る勿れ、汝の商貨僦賃を奪わず矣！汝の間架陌錢を税せず矣！」

上は普王の**誼**、翰林學士の**姜公輔**を遣わして出でて之を慰諭せしむ。賊は已に丹鳳門外に陳す、小民は聚まり觀る者は萬を以て計る。

■**[禁兵は精ならず、帝は都脱出]**初め、神策軍使の**白志貞**は禁兵を召募するを掌る、東征して死亡する者は**志貞**は皆な隠し以て聞せず、但だ市井の富兒の賂を受け而して之を補う、名は軍籍に在りて給賜を受け、而して身は市廛に居り販鬻を為す。司農卿の**段秀實**は上言す、

「禁兵は精ならず、其の數は全く少なし、卒に患難有らん、將たまた何ぞ之を待たん！」
聽かず。是に至り、上は禁兵を召して以て賊を御がしむ、竟に一人の至る者無し。賊は已に關を斬り而して入り、上は乃ち**王貴妃**、**韋淑妃**、**太子**、諸王、**唐安公主**と苑の北門より出で、**王貴妃**は傳國寶を以て衣中に系けて以て従う。後宮の諸王、公主は従うに及ばざる者は什七八。

■**[宦官の兵力]**初め、**魚朝恩**は既に誅せられ(224 卷代宗大曆五年にあり)、宦官は復た兵を典らず、**竇文場**、**霍仙鳴**という者有り、嘗て上に東宮に事え、是に至り、宦官の左右僅か百人を帥いて以て従い、普王の**誼**をして前せ使め、**太子**は兵を執りて以て殿す。司農卿の**郭曙**は部曲數十人を以て苑中に獵し、蹕を聞き、道左に謁し、遂に其の衆を以て従う。**曙**(郭子儀の子)は、**曖**之弟也。右龍武軍使の**令狐建**は方に射を軍中に教え、之を聞き、麾下四百人を帥いて従う、乃ち**建**をして後に居りて殿を為さしむ。

■**[姜公輔は朱泚の危険を指摘]****姜公輔**は馬を叩いて言つて曰く、

「**朱泚**(朱訛×)は嘗て涇帥と為り(226 卷元年にあり)、弟の**滔**之故に坐し(前卷前年にあり)、廢せられて京師に處り、心は嘗に怏怏とす。臣は嘗て謂うに、**陛下**は既に心を推して之を待つ能わず、則ち之を殺すに如かず、後患を貽す^{なか}母れ。今亂兵が若し奉じて以て主と為せば、則ち制し難からん矣。請う召して從行せしめん。」
(13-109p)

■**[帝は咸陽に逃亡]**上は倉猝に其の言を用いる暇あらず、曰く、

「及ぶ無し矣！」

遂に行く。夜咸陽に至り、數匕(匙)を飯し而して過ぐ。時に事は非意に出で、群臣は皆な乘輿の之く所を知らず。**盧杞**、**關播**は中書の垣を逾え而して出ず。**白志貞**、**王翊**及び御史大夫の**於頔**、中丞の**劉從一**、戸部侍郎の**趙贊**、翰林學士の**陸贄**、**吳通微**等は追いて上に咸陽に及ぶ。**頔**は、**頔**之從父兄弟なり。**從一**は、

齊賢(祥道の子、方正を以て高宗の重んじる所と為る)之從孫也。

■[姚令言と賊は朱泚を祭り上げる]賊は宮に入り、含元殿に登り、大呼して曰く、「天子は已に出でる、宜しく人々は自ら富を求めるべし！」

遂に歡噪(続は譟)し、争いて府庫に入り、金帛を運び、力を極め而して止む。小民は之に因り、亦た宮に入りて庫物を盗み、出で而して復た入り(続は欠如)、通夕已まず。其の入る能わざる者は、路に剽奪す。諸坊の居民は各々相い帥いて自ら守る。姚令言は亂兵と謀りて曰く、

「今衆主無く、持久する能わず、朱太尉は私第に閑居す、請う相い與に之を奉じん。」

衆は許諾す。乃ち數百騎を遣わして泚を晉昌裡(京城の啓夏門より北に入り、東街の第二坊を晉昌坊)の第に迎える。夜半、泚は轡を按じ炬を列し、傳呼して宮に入り、含元殿に居り、警嚴(卒を設けて以て警備嚴衛す)を設け、自ら權知六軍と稱す。戊申(44)旦、泚は居を白華殿(蓋し光泰門うち大明宮の東北隅に近し)に従し、榜を外に出し、稱す、

「涇原の將士は久しく邊陲に處り、朝禮を聞わず、輒ち宮闕に入り、乘輿を驚かし、西に出で巡幸を致す。太尉は已に權に六軍に臨み、神策等軍士及び文武百官に應じて凡そ祿食有る者は、悉く行在に詣るべし。往く能わざる者は、即ち本司に詣るべし。若し三日を出で、彼此を檢勘し名無き者は、皆な斬らん！」是に於いて百官出でて泚を見る。或は乘輿を勸迎し、泚は悦ばず、百官は稍稍遁げ去る。

■[源休は朱泚に決起を促す]源休は回紇に使いして還り、賞薄き(前卷前年にあり)を以て、朝廷を怨み、入りて泚を見、人を屏げて密かに語りて時を移し、泚の為に成敗を陳べ、符命を引き、之に僭逆を勧める。泚は喜び、然れども猶ほ未だ決せず。宿衛の諸軍は白幡を舉げて降る者は、闕前に列すること甚だ衆し。泚は夜苑門に於いて兵を出だし、旦に通化門より入り、駱驛は絶えず、弓を張り刃を露し、以て衆を威さんと欲す。

■[皇帝は奉天に行幸]上は桑道茂之言(226 卷元年にあり)を思い、咸陽より奉天(続は奉天縣)に幸す。縣僚は車駕の猝かに至るを聞き、山谷に逃匿せんと欲し、主簿の蘇弁は之を止む。弁は、良嗣(武後の初めに相と為る)之兄孫也。文武之臣は稍稍繼いで至る。己酉(45)、左金吾大將軍の渾瑊は奉天に至る。瑊は素より威望有り、衆心は之を恃んで稍安んず。

■[朱泚の体制構築]庚戌(46)、源休は朱泚に勸め十城門(長安京城の東面に通化・春明・延興の三門、何面に啓夏・明德・安化の三門、西には延秋・金光・開遠の三門、北に光化の一門あり)を禁じ、朝士を出ずを得る母からしむ、朝士は往往にして服を易えて僮僕を為(真似)して潜に出ず。休は又た泚の為に文武之士を説誘し、之をして泚に附か使む。檢校司空、同平章事の李忠臣は久しく兵柄を失い(225 卷代宗大曆十四年にあり)、太僕卿の張光晟は自ら其の才を負み(226 卷元年にあり)、皆な鬱鬱として志を得ず、泚は悉く起し而して之を用いる。工部侍郎の蔣鎮は出亡し、馬より墜ちて足を傷つけ、泚の得る所と為る。是より先、休は才能を以て、光晟は節義を以て、鎮は清素を以て、都官員外郎の彭偃は文學を以て、太常卿の敬鉉は勇略を以て、皆な時人の重んずる所と為り、是に至りて皆な泚の用と為る。

■[朱泚の反謀遂に定まる]鳳翔、涇原將の張廷芝、段誠諫は數千人を將いて襄城を救い、未だ潼關を出ず、朱泚が長安に據ると聞き、其の大將の隴右兵馬使の戴蘭を殺し、潰えて泚に歸す(朱泚は鳳翔、涇原に師たり、故に二鎮の兵は乱を聞き、皆之に歸す)。泚は是に於いて自ら謂えらく衆心の歸する所なり、反謀遂に定まり、源休を以て京兆尹、判度支と為し、李忠臣を皇城(京城の中に在り、唐は開元より以前に城門郎を以て皇城の諸門の開閉の節を掌らしむ。中世以後、皇城使を置く)使と為し。百司の供億、六軍の宿門(続は宿衛)、鹹な乘輿に擬す。

■[朱泚の討伐体制]辛亥(47)、渾瑊を以て京畿、渭北節度使と為し、行在都虞候の白志貞を都知兵馬使と

為し、令狐建を中軍鼓角使と為し、神策都虞候の侯仲莊を以て左衛將軍兼奉天防城使と為す。

■[朱泚は段秀實を迎える]朱泚は司農卿の段秀實が久しく兵柄を失う(226 卷元年にあり)を以て、其の必ず快
快たるを意い、數十騎を遣わして之を召す。秀實は閉門して之を拒み、騎士は垣を逾えて入り、之を劫し
て兵を以てす。秀實は自ら免かれざるを度り、乃ち子弟に謂って曰く、

「國家患ひ有り、吾は何に於いて之を避けん、當に死を以て社稷に殉ずべし。汝が曹は宜しく人々自ら生
を求めるべし。」

乃ち往きて泚を見る。泚は喜びて曰く、

「段公は來たり、吾が事は濟れり矣。」

坐に延きて計を問う。秀實は之を説いて曰く、

「公は本忠義を以て天下に著聞す、今涇軍は犒賜の豊かならざるを以て、遽に披猖(続は披猖、猩猩とは
中国の海棲の精霊、赤い怪獣)する有り、乘輿をして播越せ使む。夫れ犒賜豊かならざるは、有司之過ち也、天
子は安んぞ之を知るを得ん！公は宜しく此を以て將士に開諭し、示すに禍福を以てし、乘輿を奉迎し、復
た宮闕に歸すべし、此れ莫大之功也！」

泚は默然として悦ばず、然るに秀實を以て己と皆な朝廷の廢する所と為り、遂に心を推して之に委ねる。
左驍衛將軍の劉海濱、涇原都虞候の何明禮、孔目官(唐の藩鎮吏職使院に孔目官有り、軍府の事は細大と無く皆な其の手
を経る。一孔一目、綜理せざる無きを言うなり)の岐靈岳は、皆な秀實の素より(涇原に在る時)厚き所也、秀實は密に之
と泚を誅す、乘輿を迎えんと謀る。

■[吳澈を朱泚説得に派遣、誅殺される]上は初めて奉天(現・陝西省咸陽市乾県)に至り、詔して近道の兵を征
して入援せしむ。上言する有り、

「朱泚は亂兵の立てる所と為り、且に來たりて城を攻める、宜しく早く守備を修めるべし。」

盧杞は切齒して言つて曰く、

「朱泚は忠貞なり、群臣は及ぶ莫し、奈何して其の亂に従うと言つて、大臣の心を傷わん！臣は請う以百
口を以て其の反せざるを保たん。」

上も亦た以て然りと為し。又た群臣が泚を奉迎せんとするを勧めるを聞き、乃ち詔して諸道の援兵の至
る者は皆な三十里外に於いて營せしむ。姜公輔は諫めて曰く、

「今宿衛は單寡なり、防慮は深からざる可からず、若し泚が忠を竭くして奉迎すれば、何ぞ兵の多きを憚
らん。如し其れ然らざれば、備え有れば患ひ無からん。」

上は乃ち悉く援兵を召して入城せしむ。盧杞及び白志貞は上に言つて曰く、

「臣は朱泚の心跡を觀るに、必ず逆を為すに至らず、願わくは大臣を擇びて京城に(13-111p)入りて宣慰
せしめ以て之を察せん。」

上は以て從臣に問う。皆な畏憚し、敢えて行くもの莫し。金吾將軍の吳澈(章敬皇后の弟)は獨り請いて行き、
上は悦ぶ。澈は退き而して人に告げて曰く、

「其の祿を食み而して其の難を違えば、何を以て臣と為さん！吾は幸いに肺附に托す、往けば必ず死す
るを知らざるに非ず、但だ舉朝難を蹈む之臣無く、聖情をして慊慊(意の満たざる貌)足ら使む耳！」

遂に詔を奉じて泚に詣る。泚の反謀は已に決し、陽いつわりて命を受けると為し、澈を客省に館すと雖も、尋
いで之を殺す。澈は、湊之兄也。

■[段秀實は朱泚を裏切る]泚は涇原兵馬使の韓旻を遣わして銳兵三千を將いて、

「大駕を迎える」

と聲言し、實は奉天を襲わしむ。時に奉天の守備單弱なり、**段秀實**は**岐靈岳**に謂って曰く、
「事急なり矣！」

靈岳をして詐りて**姚令言**の符を為ら使め、**旻**をして且く還ら令め、
「當に大軍と俱に發すべし。」

令言の印を竊むに未だ至らず、**秀實**は倒^{さかさま}に**司農**の印を用いて符を印し、善く走る者を募りて之を追わしむ。**旻**は駱驛(地名。史炤曰く、駱谷關の驛なりと。韓旻若し駱谷關の驛に至るときは、既に奉天を過ぎて西南する也。炤の説は非なり。但し未だ駱驛の何の地に在るかを知らず)に至り、符を得而して還る。**秀實**は同謀に謂って曰く、
「旻は來たれば、吾が屬は類無からん矣！我當に直ちに**泚**を搏ちて之を殺すべし、克たざれば則ち死す、終に之が臣と為る能わざる也！」

乃ち**劉海賓**、**何明禮**をして陰に軍中之士を結ば令め、之に外に應ぜ使めんと欲す。**旻**の兵は至り、**泚**、**令言**は大いに驚く。**岐靈岳**は獨り其の罪を承け而して死す、以て**秀實**等に及ぼさず。

■**[朱泚は段秀實を殺す]**是の日、**泚**は**李忠臣**、**源休**、**姚令言**及び**秀實**等を召して帝を稱するの事を議す。**秀實**は勃然として起ち、**休**の象笏(武徳の初め、隋の旧制に因りて五品以上に用いる)を奪い、前みて**泚**の面に唾し、大いに罵りて曰く、

「狂賊！吾は恨むは汝を斬りて萬段(切り刻む)にせざるを、豈に汝に従いて反せん邪！」

因りて笏を以て**泚**を撃ち、**泚**は手を舉げて之を扞ぎ、才に其の額に中たり、濺血(鮮血・流血)は地に灑ぐ。**泚**は**秀實**と相い搏ちて怱怱(喧擾の貌)たり、左右は猝愕(にわかに驚く)し、為す所を知らず。**海賓**は敢えて進まず、亂に乗り而して逸れる。**忠臣**は前みて**泚**を助ける、**泚**は匍匐(ほふく)して脱走するを得たり。**秀實**は事の成らざるを知り、**泚**の黨に謂って曰く、

「我は汝と同じに反せず、何ぞ我を殺さざるや！」

衆は爭い前みて之を殺す。**泚**は一手血を承け、一手は其の衆を止めて曰く、
「義士也、殺す勿れ。」

秀實は已に死し、**泚**は之を哭すること甚だ哀しみ、三品(司農卿は従三品)の禮を以て之を葬し、**海賓**は縗服し而して逃れ、後二日、捕え得、之を殺す。亦た**何明禮**を引かず。**明禮**(史は之を終言す)は**泚**に従いて奉天を攻め、復た**泚**を殺さんと謀る、亦た死す。上は**秀實**が死するを聞き、委用するに至らざるを恨み、涕泗之を久しくす。

■壬子(48)、少府監の**李昌雛**を以て京畿、渭南節度使と為す。

■**[李楚琳は張鎰を殺す]**鳳翔節度使、同平章事の**張鎰**は、性は儒緩にして、好みて邊幅を修飾し、軍事を習わず、上が奉天に在るを聞き、大駕を迎えんと欲し、服用貨財を具え、行在に獻ず。後營の將の**李楚琳**は、人と為りは剽悍、軍中は之を畏れ、嘗て**朱泚**に事え、**泚**の厚き所と為る。行軍司馬の**齊映**は同幕の**齊抗**と**鎰**に言って曰く(13-112p)、

「**楚琳**を去らざれば、必ず亂首と為らん。」

鎰は**楚琳**に命じて出でて隴州(鳳翔府より西150里)に屯せしむ。**楚琳**は事に托して時に發せず。**鎰**は方に駕を迎えるを以て憂いと為し、**楚琳**は已に去れりと謂う矣。**楚琳**は夜其の黨と亂を作し、**鎰**は城に縋し而して走り、賊は追及し、之を殺し、判官の**王沼**等は皆な死す。**映**は水竇より出で、**抗**は傭保(雇工)と為り負荷し而して逃げ、皆な免る。

■**[鳳翔移転を一日延ばす]**始め、上は奉天が迫隘なるを以て、鳳翔(現・陝西省宝鸡市鳳翔区)に幸せんと欲す。

戸部尚書の**蕭復**は之を聞き、遽に見えんと請いて曰く、

「陛下は大いに誤まれり、鳳翔の將卒は皆な**朱泚**の故の部曲なり、其の中に必ず之と惡を同じくする者有り。臣は尚ほ**張鎰**が久しき能わざらんことを憂い、豈に鑾輿を以て測られざる之淵を蹈むを得ん乎！」
上は曰く、

「吾が行計已に決せり、試みに卿の為に留まること一日せん。」

明くる日、鳳翔が亂れるを聞き、乃ち止む。

■**齊映、齊抗**は皆な奉天に詣り、**映**を以て御史中丞と為し、**抗**を侍御史と為す。**楚琳**は自ら節度使と為り、**朱泚**に降る。隴州刺史の**郝通**は**楚琳**に奔る。

■商州の團練兵は其の刺史の**謝良輔**を殺す。

■**[朱泚は大秦皇帝と稱するも不安定]****朱泚**は白華殿より宣政殿に入り、自ら大秦皇帝と稱し、改元して應天とす。癸丑(49)、**泚**は**姚令言**を以て侍中、關内元帥と為し、**李忠臣**を司空兼侍中と為し、**源休**を中書侍郎、同平章事、判度支と為し、**蔣鎮**を吏部侍郎と為し、**樊系**を禮部侍郎と為し、**彭偃**を中書舍人と為し、自餘の**張光晟**等は各々官を拜すること差有り。弟の**滔**を立てて**皇大弟**と為す。**姚令言**は**源休**と共に朝政を掌り、凡そ**泚**之謀畫、遷除、軍旅、資糧は、皆な**休**に稟示(続は稟)す。**休**は**泚**に勧め宗室の京城に在る者を誅翦し以て人望を絶たしむ、郡王、王子、王孫凡そ七十七人を殺す。尋ぎて又た**蔣鎮**を以て門下侍郎と為し、**李子平**を諫議大夫、並びに同平章事と為す。**鎮**は憂懼し、毎に刀を懷にし自殺せんと欲し、又た亡竄せんと欲す、然るに性は怯にして、竟に果たさず。**源休**は**泚**に勧め朝士之竄匿する者を誅して以て其の餘を脅さしめ、**鎮**は力めてこれを救い、頼りて以て全き者は甚だ衆し。**樊系**は**泚**の為に冊文を撰し、既に成り、藥を仰ぎ而して死す。大理卿の膠水の**蔣沆**は行在に詣り、賊の得る所と為り、逼るに官を以てし、**沆**は絶食して病いと稱し、潜に竄れて免かるを得る。

■**[襄城陷落]****哥舒曜**の食は盡き、襄城を棄てて洛陽に奔る。**李希烈**は襄城を陷とす。

■**[李觀の兵士召募]**右龍武將軍の**李觀**は衛兵千餘人を將いて上に奉天に従い、上は之に召募を委ね、數日、五千餘人を得、之を通衢に列ね、旗鼓嚴整なり、城人は之が為に氣を増す。

■**[馮河清は奉天に合流]****姚令言**之東(涇州は西に在り、故に襄城を救うを以て東出と為す)に出でる也、兵馬使の京兆の**馮河清**を以て涇原留後と為し、判官の河中の**姚況**を知涇州事とす。**河清、況**は上が奉天に幸するを聞き、將士を集めて大哭し、激するに忠義を以てし、甲兵、器械百餘車を發し、通夕(晩より旦に至る)行在に輸る。城中は方に甲兵無きに苦しみ、之を得、士氣は大いに振う。詔して**河清**を以て四鎮、北庭行營、涇原節度使と為し、**況**を行軍司馬と為す。(13-113p)

■**[奉天を包む謀略]**上は奉天に至りて數日、右僕射、同平章事の**崔寧**は始めて至り、上は喜ぶこと甚だしく、撫勞して加える有り(崔寧は西側に鎮し、威名有り。危難の中に其の至るを見る。以て人心を鎮安す可し。故に喜ぶこと甚だしく而して撫勞すること他人よりも加える)。**寧**は退き、親する所に謂つて曰く、

「主上は聰明英武にして、善に従うこと流れるが如し、但だ**盧杞**の惑わす所と為り、以て此に至る！」

因りて潸然として涕を出す。**杞**は之を聞き、**王翽**と之を陥しいれんと謀る。**翽**は上に言つて曰く、

「臣は**寧**と俱に京城に出ず、**寧**は數々馬を下りて便液(溺)し、之久しくして至らず、顧望の意有り。」

會々**朱泚**は詔を下し、左丞の**柳渾**を以て同平章事とし、**寧**を中書令と為す。**渾**は、襄陽人也、時に亡げて山谷に在り。**翽**は整屋の尉の**康湛**をして詐りて**寧**が**朱泚**に遣るの書を為り、之を獻ぜ使む。**杞**は因りて**寧**を譖す、

「**朱泚**と結盟し、内應を為すを約す、故に獨り後れて至れり」

乙卯(51)，上は中使を遣わして寧を引いて幕下に就かしめ、
「密旨を宣す」

と雲い、二力士は後より之を縊殺す、中外は皆な其の冤を稱す。上は之を聞き、乃ち其の家を赦す。

■[朱泚は朱滔に書を遣る]朱泚は遣使して朱滔に書を遣りて、稱す、

「三秦之地は、日を指して克平せん。大河之北は、卿に委ねて除殄せしむ、當に卿と洛陽に會すべし。」
滔は書を得、西に向かいて舞蹈して(統は欠如)軍府に宣示し、牒を諸道に移し、以て自ら誇大にす。

■[皇帝は魏縣の行營に支援要請]上は中使を使わして難を魏縣の行營(馬燧諸軍の田悅を討つ者)に告げ、諸將は相い與に慟哭す。李懷光は衆を帥いて長安に赴き、馬燧(太原に帰る)、李芄(河陽に帰る)は各々兵を引いて鎮に歸り、李抱真是退きて臨洺に屯す。

■丁巳(53)、戸部尚書の蕭復を以て吏部尚書と為し、吏部郎中の劉從一を刑部侍郎と為し、翰林學士の姜公輔を諫議大夫、並びに同平章事と為す。

■[朱泚は奉天に逼らんとす]朱泚は自ら將に奉天に逼らんとし、軍勢は甚だ盛んなり。姚令言を以て元帥と為し、張光晟を之が副とし、李忠臣を以て京兆尹、皇城留守の仇敬忠を同、華等州節度使、拓東王と為し、以て關東之師を拏がしめ、李日月を西道先鋒經略使と為す。

■[朱泚は奉天に押し寄せる]邠寧留後の韓游瑰、慶州刺史の論惟明、監軍の翟文秀は、詔を受けて兵三千を將いて泚を便橋に拒ぎ、泚と醴泉に遇う。游瑰は還りて奉天に趣かんと欲し、文秀は曰く、

「我は奉天に向かい、賊も亦た隨つて至らん、是れ賊を引いて以て天子に迫る也。若かず留まりて此に壁せんには、賊は必ず敢えて我を越えて奉天に向わん。若し顧みず而して過ぎれば、則ち奉天と夾みて之を攻める。」

游瑰は曰く、(胡三省曰く、翟文秀が留まりて賊を拒がんと欲するは詔旨なり、挟み、而して兵家の常論に依り、以て將帥を制せば、未だ折れて之に従わざる者有らざるなり。韓游瑰が之を持する微かりせば、奉天は殆かりしならんと)

「賊は強く我は弱し、若し賊が軍を分けて以て我を綴め、直ちに奉天に趣き、奉天の兵も亦た弱く、何を夾み攻める之れ有らん！我は今急に奉天に趣くは、天子を衛る所以也。且つ吾が士卒は饑寒し而して賊は財多し、彼は利を以て吾が卒を誘えば、吾は禁ずる能わざる也。」

遂に兵を引いて奉天に入り、泚も亦た隨いて至る。官軍は出で戦い、利あらず(13-114p)、泚の兵は門を争い、入らんと欲す。渾瑊は游瑰と血戦すること竟日。門内に草車數乗有り、瑊は虞侯の高固をして甲士を帥いて長刀を以て賊を斫ら使む。皆な一は百に當り、車を曳いて門を塞ぎ、火を縦ちて之を焚く。衆軍火に乗じて賊を撃つ、賊は乃ち退く。夜に會し、泚は城東三里に營し、柝を撃ち火を張り、原野に佈滿し、西明寺(長安城中延康坊に在り、本は隋の楊素の宅なり)の僧の法堅をして攻具を造ら使め、佛寺を毀して以て梯冲(雲梯・衝車)を為る。韓游瑰は曰く、

「寺材は皆な乾薪し、但だ火を具え以て之を待たん。」

固は、侃(高侃は太宗・高宗に事え、將と為り功有り)之玄孫也。泚は是より日々來たりて城を攻め、瑊、游瑰等は晝夜力戦す。幽州の兵の襄城を救う者は泚の反するを聞き、潼關に突入し、泚に奉天に歸し、普潤の戍卒(神策の兵)も亦た之に歸す、衆數萬有り。

■[陸贄は皇帝を励ます]上は陸贄と語り亂の故に及び、深く自ら克責す。贄は曰く、

「今日之患いを致すは、皆な群臣之罪也。」

上は曰く、

「此れ亦た天命なり、人事に由るに非ず。」

贄は退き、上疏し、以為く、

「**陛下**の志は區宇を壹にせんとす、四もに不庭(不朝を謂う。下の上に事える、皆禮を庭中に成す。一説に庭は直なり、不庭は不直なりと)を征し、凶渠(田悅・李納)誅を稽め、逆將(朱滔・李希烈)は亂を繼ぎ、兵連なり禍い結び、行々三年に及び(建中二年に兵器始めて啓き、是に至りて三年に及ぶ)、征師は日々滋く、賦斂は日々重く、内は京邑より、外は邊陲に泊(及)ぶまで、行く者は鋒刃之憂い有り、居る者は誅求之困しみ有り。是を以て叛亂は繼ぎて起こり、怨讟並び興こり、非常之虞は、億兆慮りを同じくす、唯だ**陛下**穆然(恭し)として凝達(深き所に止まり居ること)にして、獨り聞くを得ず、凶卒して鼓行し、白晝闕を犯さ使むるに至る、豈に我が間隙に乘じ、人の攜離(離れ)に因るを以てせず哉！**陛下**は股肱之臣有り、耳目之任有り、諫諍之列有り、備衛之司有り、危きを見て其の誠を竭す能わず、難に臨みて其の死を效す能わず。臣が謂う所の今日之患いを致すは、群臣之罪なりと者、豈に徒言ならんや歟！聖旨も又た以えらく國家の興衰は、皆な天命有りと。臣は聞く天の視聽する所(書に曰く、天の視るは我が民の視るにより、天の聴くは我が民の聴くによると)、皆な人に因る。故に**祖伊**が紂を責める之辭(書經西伯戡黎にあり)に曰く『我が生は命の天に在る有らずや！』**武王**は紂之罪を數めて曰く、『乃ち曰く吾は命有り、其の侮りを懲らす罔し。』(書經泰誓上にあり)此れ又た人事を捨てて而して天命を推すは必ず不可なる之理也！《易》に曰く、『履を視て祥を考える。』(履卦上の爻辭。玉弼曰く、禍福の祥は履む所に生ず。履の極に虚り、履道成る、故に以て履を視て祥を考える可しと。其の行う所の善惡適否によりて吉凶禍福を考えるなり)又た曰く、『吉凶者、失得之象なり。』此れ乃ち天命は人に由る、其の義は明らかなり矣。然らば則ち聖哲之意、《六經》會通し、皆な禍福は人に由ると謂い、盛衰は命有りと言わず。蓋し人事理まり而して天命亂を降す者は、未だ之れ有らざる也。人事は亂れ而して天命康を降す者も、亦た未だ之れ有らざる也。頃より征討頗る頻りに、刑網稍く密に、物力耗竭し、**(13-115p)**人心は驚疑し、風濤に居るが如く、洶洶として定まる靡し。上は朝列より、下は蒸黎(人民)に達るまで、日夕族黨聚まり謀り、鹹な必ず變故有るを憂い、旋くしてなまたま屬々涇原の叛卒あり、果たして衆庶の虞る所の如し。京師之人は、動もすれば億計を逾え、固より悉く算術を知り、皆な占書を曉るに非ず、則ち明寇を致す之由、未だ必ずしもく盡天命に關わらずを明らかにす。臣は聞く理(治なり。唐人は高宗の諱を避けて皆治を以て理と為す)或は亂を生ず、亂或は理に資すと、難無きを以てし而して守りを失う有り、難多きを以てし而して邦を興すあり。今亂を生じ守りを失う之事は、則ち既往にし復た追う可からず矣。其の理に資し邦を興こす之業は、**陛下**が克勵し而して之を謹修するに在り。何ぞ乎亂人を憂えん、何ぞ乎厄運を畏れん！勤勵して息まざれば、昇平を致すに足る、豈に止だ祆氣を蕩滌し、宮闕を旋復し而して已む！」

■**[田悅は王武俊を説く]**田悅は王武俊を説き、(武俊をして)**馬寔**と與に**李抱真**を共に臨洺(魏県の行營既に散じ、李抱真退きて臨洺に屯す)に撃た使め、**抱真**は復た**賈林**を遣わして**武俊**を説いて曰く、

「臨洺は兵精にし而して備え有り、未だ輕んじ易からざる也。今戦い勝ちて地を得れば、則ち利に魏博に歸せん。勝たざれば、則ち恆冀大いに傷われん。易、定、滄(易定滄は張孝忠が拠る)、趙(康日知が拠る)は、皆な大夫之故地也、先ず之を取るに如かず。」

武俊は乃ち**悅**に辭し、**馬寔**と北に歸り、壬戌(58)、**悅**は**武俊**を館陶(元城の北 45 里、現・河北省邯鄲市館陶県)に送り、手を執り泣いて別れ、下に將士に至る、贈遺すること甚だ厚し。

■**[回紇][王武俊は回紇兵を召す]**是より先、**武俊**は回紇兵を召し、**李懷光**等の糧道を絶た使む、**懷光**等は已に西に去り、而して回紇の**達干**は回紇千人、雜虜二千人を將いて適々幽州の北境に至る。**朱滔**は因りて之を説き、與に俱に河南に詣りて東都を取り、**朱泚**に應接せんと欲し、河南の子女を以て、**金帛**(続は無し)

之を賂せんを許す。**滔**は回紇女を娶りて側室と為す、回紇は之を朱郎と謂い、且つ其の俘掠を利とし、之を許す。

■**[賈林は王武俊を説得]**賈林は復た**武俊**を説いて曰く、

「古より國家患ひ有り、未だ必ずしも之に因りて更に興こらざるにあらず。況んや**主上**は**九葉**(高宗・太宗・高宗・中宗・睿宗・玄宗・肅宗・代宗より帝に至るまで凡そ九世)の**天子**にして、聰明英武なり、天下は誰か肯えて之を捨てて共に**朱泚**に事えん乎！**滔**は盟主と為りてより以來、同列を輕蔑す、河朔は古は冀國無し、冀は乃ち大夫之封域也(胡三省曰く、滔は冀王と稱するは蓋し禹跡冀州の域を奄い、以て自ら大にして王たるなり。武俊の巡属に冀州有り、故に林、是を以て之を問す)。今**滔**は冀王と稱す、又た西に其の兄に倚り、北に回紇を引き、其の志は盡く河朔を呑み而して之を王たらんと欲すなり、大夫は之が臣と為らんと欲すと雖も(胡三省曰く、田悅が王武俊・朱滔を問すると、賈林が王武俊に説く者と、同一利害なるのみ。人は惟だ利に趨きて害を避ける、ゆえに説行わる。他の巧有るに非ざるなりと)、得可からざらん矣。且つ大夫は雄勇にして善く戦い、**滔**之比に非ず。又た本は忠義を以て手づから叛臣を誅し(李惟岳を殺す)、當時の宰相は處置宜しきを失う、**滔**の誑誘する所と為り、故に蹉跎して此に至り、若かず**昭義**と力を並せて**滔**を取るには、其の勢いは必ず獲ん。**滔**は既に亡び、則ち**泚**自ら破れん矣。此れ不世之功にして、禍を轉じて福と為す之道也。今諸道は輻湊して**泚**を攻める、日ならずして當に平ぐべし。(13-116p)天下は已に定まり、大夫は乃ち悔い而して國に歸り、則ち已に晩し矣！」

時に**武俊**は已に**滔**と隙有り、因りて袂を攘いて色を作して曰く、

「二百年の**天子**も吾は臣たる能わず、豈に能く此の田舎の兒に臣たらん乎！」

遂に**密**(續は欠如)に**抱真**及び**馬寔**と相い結び、約して兄弟と為る。然るに猶ほ外に**滔**に事え、禮甚だ謹しみ、**田悅**と與に各々遣使して**滔**を河間(瀛州に治す、現・河北省滄州市河間市)に見、**朱泚**が尊號を稱するを賀し、且つ**馬寔**之兵を請い共に**康日知**を趙州に攻めんとす。

■**[劉德信の救援]**汝、鄭應援使の**劉德信**は子弟の軍(是の年四月に諸の嘗て節度觀察都団鍊使の子弟を募り、驚を師いて軍に従わしめ、劉德信をして之を將いて襄城を救わしむ)を將いて汝州に在り、難を聞き、兵を引いて入援し、**泚**の衆と見子陵(閩郷県の西、皇天原上、漢の武帝の思子台有り。又漢の薄太后の陵の霸陵の南に在り、文帝の陵に近し、故に薄太后曰く、南のかた吾が子を望み、北のかた吾が夫を望むと。俗呼びて見子陵と為す)に戦い、之を破る。東渭橋(萬年県の北五十里に在り)に轉輸の積粟有るを以て、癸亥(59)、進みて東渭橋に屯す。

■**[朱泚は夜奉天を攻める]****朱泚**は夜奉天の東、西、南三面を攻める。甲子(0)、**渾瑊**は力戦して之を卻ける。左龍武大將軍の**呂希倩**は戦死す。乙丑(21)、**泚**は復た城を攻め、將軍の**高重捷**は**泚**の將の**李日月**と梁山(奉天城の北五里に在り)之隅に戦い、之を破る。勝ちに乗りて北げるを逐い、身は士卒に先だち、賊の伏兵は之を擒とす。其の麾下の十餘人は奮いて死を顧ず、追いて之を奪う。賊は拒む能わず、乃ち其の首を斬り、其の身を棄て而して去る。麾下は之を収めて入城し、**上**は親ら撫し而して之を哭し哀を盡す、蒲を結びて首を為り而して之を葬し、司空を贈る。**朱泚**は其の首を見、亦た之を哭して曰く、

「忠臣也！」

蒲を束ねて身と為し而して之を葬す。**李日月**は、**泚**之驍將也、奉天城下に戦死す。**泚**は其の屍を長安に歸し、厚く之を葬す。其の母は竟に哭さず、罵りて曰く、

「奚奴！國家は何をか汝に負き而して反するや？死すること已に晩し矣！」

泚が敗れるに及び、賊黨は皆な族誅せられ、獨り**日月**之母のみ坐せず。

■己巳(5)、**渾瑊**に京畿、渭南、北、金商節度使を加える。

■壬申(8)、**王武俊**は**馬寔**と趙州城下に至る。

■初め、朱泚は鳳翔に鎮し、其の將の牛雲光を遣わして幽州兵五百人を將いて隴州(陝西省関中道隴県)に戍し、隴右營田判官の韋皋を以て隴右留後を領せしむ。郝通が鳳翔に奔るに及び(李楚琳は乱を作し、郝通は隴州より奔りて之に歸す)、牛雲光は詐り疾み、皋が至るを俟ち、兵を伏せて之を執り以て泚に應ぜんと欲し、事は洩れ、其の衆を帥いて泚に奔る。汧陽(隴州に属す。州の東 60 里に在り。陝西省関中道汧陽県、現・宝鸡市千陽県)に至り、泚が中使の蘇玉を遣わして詔書を繼して皋に中丞を加えるに遇い、玉は雲光を説いて曰く、

「韋皋は、書生也。君は我と俱に隴州に之くに如かず、皋は幸いに而して命を受ければ、乃ち吾が人也。命を受けざれば、君は兵を以て之を誅すべし、孤[犬屯](豚の子)を取るが如き耳！」

雲光は之に従う。皋は城上より雲光に問いて曰く、

「曷者告げず而して行き、今而して復た來る、何ぞ也？」

雲光は曰く、

「曷者に未だ公の心を知らず、今公は新命(朱泚が皋に中丞を加えるの命を謂う)有り、故に復た來たる、願わくは腹心を托せん。」

皋は乃ち先ず蘇玉を納れ、其の詔書を受け(13-117p)、雲光に謂って曰く、

「大使は苟くも異心無ければ、請う悉く甲兵を納れ、城中をして疑いから使めよ、衆は乃ち入る可し。」

雲光は皋が書生なるを以て、之を易しとし、乃ち悉く甲兵を以て之に輸り而して入る。明くる日、皋は玉、雲光及び其の卒を郡捨に宴し、甲を伏して之を誅す。壇を築き、將士に盟いて曰く、

「李楚琳は本使(張鑑をいう。李楚琳は鑑の部曲將にして鑑を殺して逆に従う)を賊虐す、既に上に事えず、安んぞ能く下を恤れまん、宜しく相い與に之を討つべし！」

兄の平弁を遣わして奉天に詣らしめ(命を行在所に謂う)、復た遣使して援を吐蕃に求めしむ。(朱泚が兵を遣わして之を攻め、吐蕃を引きて以て援と為さんことを恐れるなり)

令和 8 年 6 月 8 日 翻訳開始 10966 文字

令和 8 年 7 月 8 日 翻訳終了 23158 文字